

重衡の作者

三宅晶子

〈笠卒都婆〉の詞章が『申楽談儀』に、「重衡の能」として二箇所、曲名無しで一箇所言及されており、岩波日本古典文学大系『謡曲集下』（横道萬里雄・表章校注1983）に「世阿弥時代の能」（笠卒都婆）として所収（このテキストを指す場合、以下「大系本」と略称する）された。以来能界・能楽学界で注目されてきた。

世阿弥時代の能という以外作者に関する情報はないが、観世元雅作かとされることが多い。しかし筆者は金春禅竹ではないかと考えている。それについて「仏罰を受ける重衡」（『花もよ』第71号2024）「能の現代64重衡」という小考を発表したが、最も特徴的な本説処理に関してのみを指摘したにすぎない。それ以外にも禅竹的な特色があるので、本稿でそれについて取り上げたい（曲名は重衡とし、大系本所収の本文を使用する）。

〈重衡〉の詞章は、漢詩や和歌の引用、仏教関連の難語の使用が多く、決してわかりやすい表現ではない。たとえば前シテ登場の段

「サシ」花は雨の過ぐるによつて紅まさに

老いたり、柳は風に欺かれて、緑やうや

く低れり、寒林に骨を打つ、靈鬼泣く泣く前生の業を恨み、りんやに花を供する天人、返すがへすも帰性の善を喜ぶなるは、ただ順逆の因果なるべし、……

では、傍線部は『百聯抄解』所収の詩を二句引用している。『百聯抄解』の引用は世阿弥作の〈西行移〉などにもあるが、

有難や上人のおん値遇に引かれて、恵みの露あまねく、花檻前に笑んで声未だ聞かず、鳥林下に啼いて涙尽き難し。

上人（西行）の導きで有難い仏法の恵みを受け用されているので、わかりやすい。

二句の引用は禅竹作の〈芭蕉前シテ登場の段「サシ」や、禅竹作と考えられる〈熊野〉「クセ」前の「サシ」などにもあり、どちらも長々と引用して、漢詩の表現・リズム・内容をすべてそのまま取り込んでしまふ、しかもその内容をどう利用しているのかは説明されていない。わかりにくいとも評される、禅竹の作詞法の特徴の一つである。

〈重衡〉の傍線部もただ漢詩が二句引用して

あるだけで、そのまま別の引用へと移っていくので、その詩をどう読み取って良いのか、その場では理解できない。『百聯抄解』の二句引用の方法の共通性が、まず禅竹の傾向と似ている部分である。

続く破線部は、典拠は不明だが、〈山姥〉「立回り」前の「サシ」にも引用がある詩句で、その前後関係が問題にされている。それはさておき、ここで気になるのは「ただ順逆の因果なるべし」と続く点である。傍線部・破線部二種類の長い詩句を「なるは」という短い言葉で受けているのである。そして「法則通りに物事の因果が決まっていくことを表しているのだ」と説明する。どう法則通りなのか言及がないので、引用文を受け取った人が自分なりに咀嚼して解釈しないと理解できない。

この説明不足ともいえる引用の仕方は、例えば禅竹作の〈玉葛〉前シテ登場の段を連想させる。

「上ゲ哥」……身の程は、なほ浮き舟の楫を絶え、綱手悲しき類ひかな、くく。

二重傍線部は「由良のとをわたる舟人楫を絶え行方も知らぬ恋の道かな」（『新古今集』恋一、曾禰好忠を踏まえ、波線部は「みちのくはいづくはあれど塩竈の浦漕ぐ舟の綱手かなしも」（『古今集』東歌や「世の中は常にもがもな渚こぐ海人の小舟の綱でかなしも」（『新勅撰集』旅、源実朝）で使用された歌句である。どの歌もよく人口に膾炙しており、それらを背景とした歌句の引用だろうとは、当時の観客に

たやすく理解されただろうが、「楫を絶え」はそのまま不安定な身の上の喩えと直結すると、「綱手悲しき」は歌では「小舟が引かれていく綱手がいとおしい」という意味なので、シテの身と直結するとは言いがたい。「類ひ」とまとめて片付けられているのだが、具体的にどう同類なのか、理解しがたい部分なのである。ただ不安定で悲しい身の上と言っているだけなのかもしれない。引用処理の乱暴さ、というか素っ気なさが、〈重衡〉の該当部分と共通する。

次に〈重衡〉には「身に染む色の消えかへり」「露の身の消えかへり」という、類似表現が使用されていることに着目したい。

前シテ登場の段の締めくくり所に、
「上ゲ哥」老いの鶯音も古りて、く、身に染む色の消えかへり、春の日の影供に、遅き歩みをたどり来て。通ひ慣れたる奈良坂や、花の木蔭に着きにけり、

とある。そして前場最後、重衡の亡霊であると全体を明かして姿を消す場面で、

5「ロンギ」……跡を訪ふ、人しなれば春草の、影恥づかしや露の身の、消えかへりなき跡の、姿見ゆるぞ悲しき……

「消えかへり」は印象的で強い響きの耳に残る歌句である。それを前シテの登・退場二場面で使用しているのは、この言葉に特別な意図的意識があるということなのだろう。退場場面の方は消えかかっていた「露の身」が返ってきて姿を見せたということで、わかりやすい

使用方法であろう。このような使用例としては〈定家〉「露霜に消え返る、妄執を助け給へや」では、消えかかっては再び蘇ってくる妄執を助けてくれと使っている。

登場段の方はかなりわかりにくい。鶯の音が老成してきた、春も長けた季節を示した後「身に染む」と続くので、鶯の音が身に染むということになる。ところが「消えかへり」が具体的に何を表現しているのかわかりにくいのである(天系本補注などで検討されている)。しかし退場段に同じ「消えかへり」が使用されている以上、後ろの文に連結して「消えかかっていた身が返ってきて姿を見せた」という使用であると考えるべきではないだろうか。

〈野宮〉前シテ登場の段「上ゲ哥」の「身に染む色の消へかへり」と共通する用法なのである。禅竹作の〈定家〉や禅竹作の可能性が高い〈野宮〉と共通する用法となると、この歌句は禅竹が好んで使用しているということになる。しかも〈重衡〉では二度使用するというこだわりを見せているところからみて、最初の使用例という可能性も出てくる。

〈重衡〉は『申楽談儀』に三度言及がある。謡い方に関する記事で、いずれも細かい謡い方の注意である。特に

重衡に、「こゝぞ閻浮の奈良坂に」、此「こゝぞ閻浮の奈良坂に」の節、曲舞には有まじき節也。小歌節也。曲舞ならば、送りてひん訛らするやう成べし。

は「曲舞と小歌のvariety」の項目の最初の記事

であるが、「曲舞には有まじき」とかなりきつい口調で注意をしている。全面否定するのはないが、どうにかすべき傷として気になるといった雰囲気漂っている。他の二箇所「文字訛り・節訛り」の項の「三笠の森」と「一念弥陀仏」、「心根を知る」の項の「鬼ぞ撞く成、恐ろしや」の謡い方も同様で、作曲法や謡い方についての細かい注意である。

〈重衡〉に関する三つの記事から見える世阿弥の評価は、作品自体を貶してはいないので、レパートリーとして使用可能だが、細部まで正確に理解しないで作られている作品といったところであろうか。禅竹の若い頃の作品と考えると、新進の若手の作品をしつかりチェックして、良くしてやりたいという、世阿弥の姿勢が浮かび上がってくる。

従来作者不明の『申楽談儀』所収曲について、禅竹作の可能性をあまり考慮してこなかったのは、二〇代前半以前ということで、あまりに若いからなのだろう。〈重衡〉もその一曲である。筆者は〈娘捨〉も禅竹作だと考えており、近年同じ考えを示される研究者が増えている。禅竹では若すぎるといふ理由で作者の候補から外すべきではないだろう。

注 〈野宮〉については「野宮の身にしむ色」(研究十二月往来)一〇六「鏡仙」三八五号1990、『歌舞能の系譜』ベリカン社刊2019に再録)で論じたので参照された。

(奈良大学教授)